



ショートコメント

★★★★

Data 2026-2

監督・脚本：ジャン＝リュック・ゴダール

出演：エディ・コンスタンティヌ／ハンス・ツイシュラー／クラウディア・ミヒェルゼン／アンドレ・ラバルト／ナタリー・カデム

新ドイツ零年 (ALLEMAGNE ANNÉE 90 NEUF ZÉRO)

1991年／フランス映画

配給：サジフィルムズ/62分

2026 (令和8) 年1月8日鑑賞

テアトル梅田

👁️👁️ みどころ

2025年に戦後80年の節目を迎えた日本では、“あの戦争”を振り返り、考える企画はごくわずか。アホバカバラエティーの全盛状況は不変だ。しかし、同じ敗戦国たるドイツでは、ロッセリーニ×ゴダール【2つのゼロ年】という素晴らしい企画が！

前者の零年は1945年、後者のそれは1990年だが、それは一体なぜ？同じ発想で「日本零年」、「新日本零年」を考えれば、如何に・・・？

前者が描く終戦直後の破壊された建物と瓦礫の山が残るベルリンの姿は生々しい上、そこで生きる少年の姿とあっと驚く結末には絶句！他方、“ベルリンの壁崩壊”後の老スパイの西への帰還の旅を描く後者は“さすがゴダール映画”とも言えるが、あまりにも難解だから、私にもチンプンカンプン！？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆2025年の日本は、「戦後80年」の節目としてさまざまな企画がされたが、その年末年始には、ロッセリーニ×ゴダール【2つのゼロ年】が実施されたからすごい。これは、ロベルト・ロッセリーニ監督の『ドイツ零年』(48年)とジャン＝リュック・ゴダール監督の『新ドイツ零年』(91年)をあえて同時に上映する企画だ。チラシには次のとおり紹介されているが、これを読めば、こりゃ必見！

第二次世界大戦後の廃墟と化したベルリンを舞台に、ひとりの少年を通して戦争がもたらす残酷さを描いたロベルト・ロッセリーニの『ドイツ零年』(1948年)と、ベルリンの壁崩壊の翌年、東ドイツに潜伏していた老スパイの西側への帰還の旅を描いたジャン＝リュック・ゴダールの『新ドイツ零年』(1991年)。1945年をドイツにとっての《ゼロ年》と示し、戦後ベルリンの“虚無の廃墟”を冷徹に描いたロッセリーニに対し、ゴダールは東西ドイツが統合された1990年を《新ゼロ年》として、ふたたび“虚無の廃墟”にもどされたドイツを見つめ直した。思いがけない、でも必然にみちた2作品の邂逅が今実現する。

◆また、チラーシによると、ゴダール監督の『新ドイツ零年』の作品紹介は次のとおりだ。
すなわち、

アメリカ合衆国出身の歌手兼俳優エディ・コンスタンティーヌが、『アルファヴィル』(65)以来久々にゴダールと組んだ作品。最晩年のコンスタンティーヌがここで演じるのは、自身の当たり役にして『アルファヴィル』でも演じたFBI捜査官(ゴダール映画では秘密諜報員)レミー・コーション役だ。本作の背景には、東欧革命からベルリンの壁崩壊の流れのなかで生じた、1990年10月3日の東西ドイツ「再統一」がある。原題では「ドイツ」の語に続いて「90」が数字とアルファベットで綴られているのだが、これはゴダール流のごろ合わせで、「90(neuf zéro)」は「新たな零」とも解釈できる。つまり、1990年とは「新零」年でもあると解することができる。もちろんこれは、ロッセリーニの映画『ドイツ零年』(48)にもひっかけられた洒落で、第二次大戦終結直後にして東西分断直前のドイツと、再統一後のドイツを重ねて、ともに同国にとっての始まり(過去の清算あるいは再生)でもあれば終わり(無あるいは消滅)でもあるような零の年とする意図がうかがわれる。本作は、かつて西側「自由世界」の擁護者だった「最後のスパイ」たるレミーが、長年潜伏していた旧東ドイツから、冷戦体制崩壊と軌を一にして徒歩で「西」へ向かいながらさまざまな象徴的人物と出会う姿を描いた一種のロードムービーである。そこに、『ドイツ零年』からの抜粋映像を含むさまざまな映画、音楽、絵画、文学、哲学をめぐる参照、実在の人物や現実の事件への言及等がぶつかり合い、層をなすように重ね合わされつつ、ドイツの過去と現在をめぐる高密度に圧縮された思弁が展開されていく。そして、老いた元スパイの彷徨がそのままドイツ史を巡る旅＝批評的エッセイとなることで、映画の主題である「孤独」、個人のそれではなく国家や国民の孤独が浮かび上がる。

[遠山純生]

◆第2次世界大戦後に訪れた「東西冷戦」の中、ドイツは東西に分断された上、「ベルリンの壁」が長期化することになったから、ドイツと同じ第2次世界大戦の敗戦国となった日本以上にドイツは大変だ。日本は1951年のサンフランシスコ講和条約と共に締結された日米安保条約によって、アメリカの軍事力を頼りにした経済復興(=軽装備高度経済成長)路線を確立させて大成功を収めたが、ドイツは「ベルリンの壁」をめぐるスパイが暗躍する時代が長く続いた。その結果、『寒い国から帰ってきたスパイ』(63年)等のスパイ映画の名作が次々と生まれたが、それに従事した(させられた)スパイたちは大変だった。また、「ベルリンの壁」による東西ドイツの分断が継続すれば、スパイたちが活躍する舞台も続くが、1989年に「ベルリンの壁」が崩壊した上、1990年に東西ドイツが統一されてしまうと・・・。

◆本作の主人公は、30年間東ドイツに潜伏していた西側の老スパイのレミー・コーション

(エディ・コンスタンティヌス)だが、他方で、軍情報部のゼルテン伯爵（ハンス・ツィシュラー）が登場し重要な役割を演ずるので、本作ではこの2人に注目！本作は突然仕事がなくなってしまった（？）レミーの西への帰還の旅を描くものだが、そこにはいかにも「これぞゴダール流！」という演出が濃厚だから、それに注目！

◆1848年に『共産党宣言』を世に出したドイツ人のカール・マルクスがドイツの哲学（弁証法）に精通していたのは当然だが、その後の『資本論』（1867年）は経済学にポイントを置いたものだった。マルクスと同じドイツ人のゴダール監督がドイツに関連する哲学、文学、音楽、映画等に精通しているのも当然。したがって、本作にはレミーが西ドイツへの帰還の旅の中、何とも難解なそれらに関する物語（？）が提示されてくるので、それを理解するためにはしっかり勉強することが不可欠だ。もっとも、突然の「ドン・キホーテ」の登場程度なら私にも理解できるが、哲学、文学、音楽関係のクソ難しい話が次々登場してくると、はっきり言って、私にはチンプンカンプン・・・。

◆ゴダール監督がなぜベルリンの壁が崩壊した1990年を「新ドイツ零年」としたのかはじっくり考えなければならぬが、同じ敗戦国たる「新日本零年」は1951年のサンフランシスコ講和条約と日米安保条約締結の時？それとも1964年の東京オリンピックの時、つまり東京タワーの建設、皇太子殿下の御成婚、東京オリンピックの開催等を契機として高度経済成長時代に入った時期？他方、日本では1989年末に土地バブルが崩壊した後、失われた10年、20年、30年に突入したから、それを「新日本零年」と考えることもできる。さて、あなたのご意見は？

ゴダール監督が本作を「新ドイツ零年」と題するについて、ロベルト・ロッセリーニ監督の『ドイツ零年』との関連性を強く意識していることは、ベルリンの街の撮り方等を見れば明らかだが、本作のストーリー構成は『ドイツ零年』とは全然異なるもの。また、本作で語られる内容も前述のとおり極めて難解だ。軽薄でバカバカしい邦画しか観ていない今ドキの日本の若者とはとより、学生運動を体験した私たち団塊世代でも本作は超難解だから、私にもチンプンカンプン！？



2026（令和8）年1月13日記